

城の防御：狭間

大天守の壁にある長方形の穴は「狭間」と呼ばれ、攻撃してくる敵に矢を放ったり、火縄銃を撃ったりすることができるようになっていた。抜け穴は、門やバリケードなど他の防御構造にも組み込まれ、さまざまな武器に対応できるよう、円形や三角形にすることもできた。天守閣を使用しないときは、雨風を防ぐために木製の栓をすることが多かったが、松本城ではそのようなことはしなかった。

大天守、乾小天守、渡櫓の 3 つの古い建築物には、合計 115 個の狭間がある。正方形の狭間は長銃身の火縄銃のために設計され、長方形の狭間は弓を使う兵士のために角度がよくなるように設計された。正方形の狭間は高さが低いものが多く、これは砲手がしゃがんだ姿勢で射撃していたことを示している。狭間から内堀の端までの距離は約 60 メートルで、これは火縄銃が正確に発射できる距離でもある。これは松本城が築かれた 16 世紀後半に鉄砲戦が盛んであったことを示す戦略的な設計である。